

『ダムを活かした地域づくり』～大町ダム水源地域ビジョン～

北陸地方整備局大町ダム管理所 管理係 清水 喜博

1. はじめに

大町ダムは、北アルプスを源流とする信濃川水系高瀬川上流に位置し、洪水調節、不特定用水の補給、上水道用水の確保、発電を目的に昭和 61 年に管理を開始した多目的ダムである。ダムの完成により、下流域では水害からの安全の確保、農業用水等が安定供給されるようになり、また、龍神湖（大町ダム湖）散策コースやダムに隣接する高瀬渓谷緑地公園も整備され、人々と自然のふれあいの場も生まれてきた。このように近年のダムには治水・利水・発電等の機能に加え、ダムを活かした地域づくりの場としての機能も求められてきている。以上のような視点にたって、大町ダム水源地域ビジョン（以下、本ビジョン）では、ダムのもつ多様な機能を活かし、水源地域の活性化と高瀬川流域内の連携・交流を目指した「行動計画」を策定した。

2. ビジョン策定の進め方

2.1 策定にあたっての課題

策定にあたっては、その実現性を高めるために流域住民参加の場を設け、流域に関心がある住民からのアイデアを基本に組み立てることが重要であった。さらに、計画実現に関係する機関との連絡調整の機会の確保、ダムへの親しみやすさの増大が求められるとともに、比較的短期間で策定する必要があった。これらに対応していくため、以下のような運営の工夫を行った。

2.2 流域住民参加の体制づくり

本ビジョンは学識経験者や流域の自治体関係者、住民からなる大町ダム水源地域ビジョン策定委員会及び委員会の部会にあたる会議を設置し、幅広い発想でビジョンへの提言をとりまとめ策定を進めた。このうち部会委員の一部は一般公募とし、「高瀬川流域に居住されている方で今後の大町ダムを活かした地域づくり（交流活動）に関心があり、ビジョンの実現にご協力頂ける 20 歳以上の方」とし、今後の連携も見据えた応募形式とした。

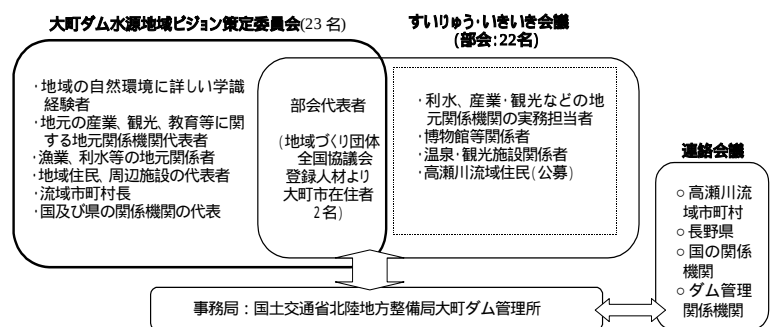


図 - 1 大町ダム水源地域ビジョン策定体制 模式図

2.3 部会（すいりゅう・いきいき会議）の設置とアイデア重視のビジョン策定

2.3.1 親しみのある部会名称

部会の通称である「すいりゅう」と「いきいき」は、大町ダムのキャラクターであ

る「犀龍と泉小太郎」にまつわる伝説や、会議の役割等を勘案して名付けられた。

- 犀龍（さいりゅう）と泉小太郎伝説として残る「水の神」によってもたらしたとされる安曇野を潤す高瀬川の「水（すい）」「川の流れ」が「いきる」ようにするために、みんなで知恵を出し合う会議であること。
- 大町ダムに集まる水、そこから流れ出る水を活かし、高瀬川の流域（りゅういき）を中心とする活性化に向けたきっかけとなる会議であること。

2.3.2 部会でのアイデアを中心にした議論

平成14年10月～15年3月の間、委員会・部会（各4回）、連絡会議（3回）を実施した。第1回委員会で進め方等の確認を行ったうえで、2回の部会を連続して行った。KJ法を用いることにより「ダムの開放」等の6つの視点から委員1人1人の想いを発言していただき活発な会議となった。



写真 - 1
KJ法を用いアイデアを壁紙に貼り付けて検討（第2回部会より）

（写真 - 1）ここで出たアイデアを、第2回委員会へ報告し、3回目部会では、委員の立場からより早期に実現可能な取り組みについての意見をあげていただいた。その後、第3回委員会、第4回部会にビジョンの素案を提示し、意見交換を行ってとりまとめに至った。

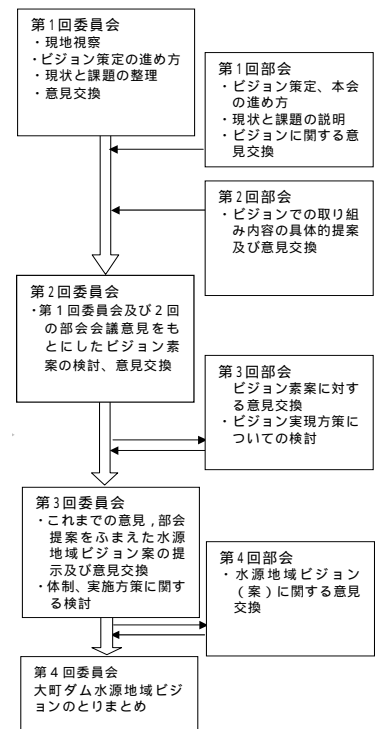


図 - 2 ビジョン策定までの流れ

2.3.3 とりまとめの工夫

意見や提案のとりまとめには、キャッチフレーズ等を用いて体系化し、分かり易さと親しみの向上に努めた。また、出されたアイデアは、「可能な取り組みから着実に」の視点を持ち、1つ1つの意見を事務局側で実現の可能性に沿って絞り込む作業は極力行わず、これによって部会員や委員から、より実現に向けた工夫を含めた具体的なアイデアや提案をいただくことができた。

2.4 広報誌の発行、ホームページでの状況報告

部会委員への委員会の経過報告や、流域住民への報告のため、「すいりゅう・いきいき会議レポート」を作成し、ホームページ等を通じて情報を発信した。（写真 - 2）これにより、部会や委員会において事務局の説明を簡略化でき、迅速に周知できた。



会議レポートによる周知
（ホームページでダウンロード可）

新聞折込チラシによる周知

写真 - 2

3.1 理念

みんなでずく出す すいりゅう・いきいきプラン

～人と自然の持続可能な交流をめざして～

ダム

**既存資源の保全
と活用**

渓谷の豊かな資源を大切に、
そして、有効に活かそう！

**学び、体験することから
はじまる活性化**

「知って、見て、ふれて
学んで、肌で感じて」
をきっかけにしよう！

**地域内の多様な
ネットワークの形成**

地域に人や物の様々な
つながりをうみだそう！

図 - 3 ビジヨンの理念・方向性に関する概念

3.2.1 5つの方向性に沿った体系（表 - 1）

表 - 1
大町ダム水源地域ビジョン 取り組み一覧

方向性	取り組み	取り組み内容と 主な具体化のアイディアの概要	目 標			役 割	民 間
			概ね 3年 以内	概ね 5年 以内	概ね 10年 以内		
			大町 ダム	市 村	町 郷	県 機 関	民 間
ダムの開放・ ダム湖利用 (いかす)	A ctivity	ダム資料室からの情報発信	○分かりやすく、親しみもてる展示の充実				
			○地域の発展と水利用の歴史の説明の充実				
			○水害の歴史とダム建設などの説明の充実				
		龍神湖の散策コースでの利用者サービスの充実	○利用や安全面での配慮とサイン等による案内の充実 (道標、説明案内等の標示板の充実等)				
体験学習 (たいかん)	L earns	高瀬沢谷緑地公園の改善	○利用者ニーズに応じた改修(眺望確保・遊具設置等)				
		ダムへの関心を高める広報・活動の実践	○親しみやすいパンフレットの作成、最新の情報提供				
		ダム湖一帯での水辺レクリエーション利用	○地域住民参加による環境美化活動等の実践				
			○周辺一帯をアウトドアスポーツの場として利用 (カヌー体験、ダム内での釣り場の提供等)				
参加・交流 (ふれあい)	O rientation	総合学習の場の提供 (ダム・水利用、自然環境の体験学習)	○ダム、水利用の体験学習の場の提供 (ダム、水利用、水の価値、歴史等の勉強の場)				
			○魅力ある環境学習の機会の提供 (地質、鉱物の学習・野生動物物の学習等)				
		学習を支える人材・ツールの充実	○実施のための情報提供の充実(自然観察ノートの活用、ガイドブック、ニュースレターの作成等)				
			○インタプリター等の人材確保、支援体制の構築				
周辺施設・ 資源の利活用 (れんけい)	Network	遊べる・学べる・親しめる水辺の創出	○河川敷の有効利用による野外レクリエーション空間の整備・拡充(親水公園、オートキャンプ場の整備等)				
			○都市住民の自然体験、上下流の住民の交流の場の提供				
			○高瀬川水系を活かした自然体験・学習機会の確保 (川の観察会、草木・石を活かしたクイズ体験等)				
		高瀬沢谷の豊かな自然の探検	○美しい風景、静かな湖面の保全、鑑賞 (四季の風景PR・湖面鑑賞、湖面の保全等)				
地域産業の 活性化 (はってん)	G rowth	自然・歴史的資源を活かしたイベント	○自然資源を活かしたイベント (地産の資源化、流木クラフト等)				
			○和歌・俳句愛好者向けのイベント、旧道の史跡発見等のイベント				
		集客力向上のためのしかげづくり	○イベント、コンテスト等の企画、開催 (写真、絵等のコンテスト、注目度の高い取り組み(ダム壁面の活用、ダムの日設定等))				
			○高瀬沢谷フェスティバルの実施				
観光に関する情報・人材の ネットワークの形成			○特典、顕彰によるイベント集客の工夫				
		展示・解説に関する施設間の相互連携・役割分担	○テブコ館、エネルギー博物館、ダム資料室、地下発電所等の相互連携(展示等の役割分担の明確化)				
		高瀬沢谷一帯を楽しむ多様な移動手段の創出	○ダムを拠点とした回遊型の移動手段の確保・充実 (既存バス利用・乗り入れ、マウンテンバイクの通行等)				
			○高瀬沢谷観光との連携 (3ダムに遊覧船、黒部ダムと高瀬沢谷観光の連携等)				
観光に関する情報・人材の ネットワークの形成		高瀬3ダムの存在を伝えるサインの整備	○道路標識等におけるダム施設案内・誘導の見直し (魅力あるサインの設置、3ダムの案内)				
		歩いて楽しむルートの充実	○多様なニーズに応えた上流のルート整備 (大町ダムと葛温泉間の遊歩道整備等)				
			○里山トレッキングコースの整備 (大町ダムと国富公園を結ぶルートづくり・林道親沢線・駒越線の利用等)				
		ダム、温泉、水にまつわる歴史的資源の活用	○ダムに沈んだ資源の掘り起こしと情報発信 (旧権ヶ岳登山道、森林軌道跡等)				
観光に関する情報・人材の ネットワークの形成			○湯道の復元、水や湯に関する史実等の伝承				
		資源を活かした持続性ある観光振興への寄与	○体験・滞在を重視した観光資源の創出 (農産物の収穫体験と高瀬沢谷の連携等)				
			○清流釣りの多様な楽しみの提供				
		観光に関する情報・人材のネットワークの形成	○広域的多様な観光に対応できる連携の充実 (既存博物館の特色付け・連携の強化観光ボランティア活用、情報センターの確保等)				

注)なお、……に示されている内容や()内の取り組み内容は現段階でのアイディアであり、今後、実現のための課題を解決し、実施主体等の詳細な計画をまとめていく必要がある。

連絡会議を通じた調整を経て、実現の目標期間や役割分担を定めた。目標期間は「３年以内」「５年以内」「１０年以内」の３期に区分した。取り組みのアイディアのなかには比較的容易にできる内容や、徐々に進めるべき内容等があり、可能な取り組みから着実に実現を目指す考えが必要となった。この考えを明確

に示すため、「以内」という表現を用いた目標期間とした。

3.3 実現に向けて

ビジョンの実現に向けた方策として以下の3点を掲げた。

可能な取り組みから着実に進める

実施体制や予算確保等ビジョンをとりまく様々な情勢に配慮し、既存施設を活用しながら早期に実現が可能な取り組みから着実に進める。

ダムに来ていただく、知ってもらうことから取り組む

ビジョンの実現には、より多くの人にダムや水、地域を知ってもらうことが重要である。このため、ダムの開放、利活用、体験学習、参加交流など工夫をしながら学び、体験することからはじめる。

実施のための体制づくりを進める

本ビジョンでの個々の取り組みを実現するには、様々な機関の連携が必要である。関係する機関等の役割分担を明確にするとともに、連携と協力のもとに推進する体制を構築する必要がある。(図-4)

4. 今後の課題

4.1 実施に向けての体制づくり

ビジョンでの取り組みは流域単位で行う内容も多く、地元市町村との連携により、実現のための体制構築が必要となる。ダムの位置する大北地域に地域づくりの人材育成等も進められてきており(生涯学習関連の人材確保、白馬マイスター制度等)今後こうした人的資源を有効に活用するためにも、県や地元市町村との連携により、推進のための事務を処理できる組織づくりが必要である。

4.2 情報の収集・整理

今後、会議の中で出された様々なアイデアを実現していくためには、流域に埋もれている情報をさらに収集する必要があると考えられる。策定を契機に構築された人と情報のネットワークをより強化し、ビジョンの取り組み案に沿って必要な情報を収集・整理し、実現に向けた基盤を整えることが重要である。

5. おわりに

本ビジョン策定を通じて、地域と水の関わりへの理解を深めるとともに、流域住民参加による合意形成の手法を研究することができた。また、流域のなかで様々な知見や情報、アイデアを持つ方々との関係も構築できた。今後は、本ビジョン実現のために、このような関係を効果的に活かす手法や工夫を流域自治体とともに研究していくことが重要である。

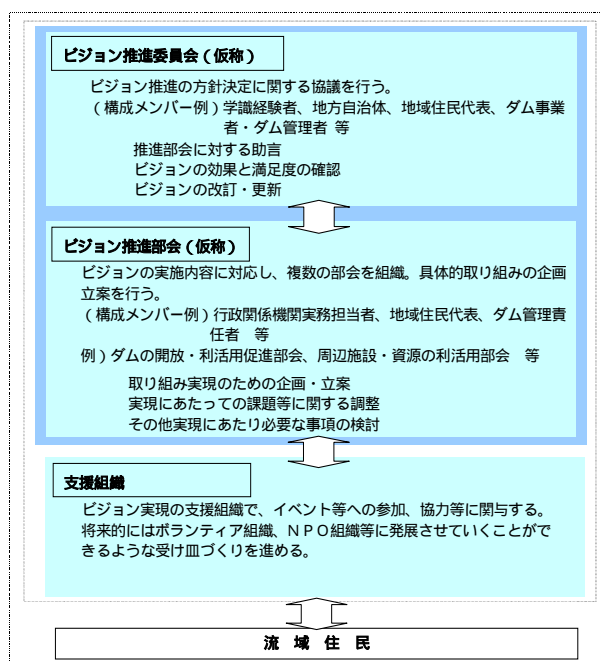


図-4 ビジョン実現のための体制イメージ